

※1 メディア・アクティビスト/米国の一般市民が家庭用ビデオカメラで撮った映像を、公共の電波を使い報道する市民運動家達の総称。
※2 ポピュリズム/一般大衆の考え方・感情・要求を代弁しているという政治上の主張・運動のこと—「広辞苑 第六版」(岩波書店)より。



インタビュー
interview

あいち
トリエンナーレ
2019

芸術監督

津田 大介

——ジャーナリストであり、メディア・アクティビストである津田さんが、なぜ専門外である国際芸術祭の芸術監督に指名されたのでしょうか。

津田 あいちトリエンナーレでは、芸術監督を選任するにあたって有識者会議が開かれるんです。これまで芸術監督を経験された方々とその他の有識者で構成される。それが2017年におこなわれて、全会一致で僕が指名され

たんです。確か6月だったんですけど、メールが来て。あなたがあいちトリエンナーレ2019の芸術監督に選ばれましたっていう、いわば事後報告のような形で。そういうものって、事前に「興味はあるか」とか打診があるのかと思ったらそうではなく、いきなり事後報告で振り込め詐欺みたいなメールが来たので驚きましたね(笑)。ちょうど2016〜17年って激動の時期でしたよね。トランプ大統領が誕生したり、ナシヨナリズムやポピュリズムが高まっていた。国内でも国外でもかつての秩序とは違う、かつては起きなかつ

たようなことが世界中で起き始めている。世界が激動になってきた中で、アトで何ができるのか、社会を接続することがディレクターや芸術祭にも求められていたというところで、僕の名前が挙がってきたのかなと思っています。

——指名されてから芸術監督を受諾されるまでに葛藤はありましたか？

津田 ありましたよ。あまりにも素人なので。ただ、現代アーティストと対談する仕事の経験はありましたし、「大地の芸術祭」のオフィシャルサポーターという形で、広報などの協力はしてたので全く土地勘がないというわけでもない。とはいえ、素人がどこまでできるかってのもありました。でも仕事として受けても受けなくても後悔すると思っただんですよ。こういう大きな仕事があるって、こういう仕事をやるのも一生に一度あるかないかだなんてことを思えば、受ける後悔と受けない後悔とだったら

受けない後悔をするよりも……と。でも結局今は受けて後悔しているという(笑)。まあ、大変だったことですけどね。
——津田さんは中田ドラゴンズファンだそうですが、これは芸術監督就任とは関係ないですか？

津田 さすがにそれは関係ないかと……。参加アーティストの小泉明郎さんも熱狂的な中田ファンで、この間一緒に試合を観に行きました。すごくモチベーション高くなって、「あいちトリエンナーレに参加できてよかったです！」みたいな感じになってました(笑)。

——津田さんは芸術監督就任以前から現代美術に興味を持っていらっしやうたようですが、何がきっかけだったのでしょうか？

津田 実は、あいちトリエンナーレがきっかけなんですよね。2013年のあいち

トリエンナーレにたまたま映像プログラムのトークイベントのゲストとして呼んでいただいて、愛知芸術文化センターに行っただけです。せっかく来たんだから、トリエンナーレを見学して行こうと思いました。その時のトリエンナーレのテーマが「揺れる大地」ということで、震災が取り上げられてたんですね。僕は震災が起きてからずっと東北に取材に行っていたためか、展示されている作品をすごく面白く感じました。「あ、なるほど。ジャーナリストではなく、美術分野の人が震災に応答するところ、震災に関する文脈についての知識はあったので、アーティストが表現したいことをすぐに理解することができた。その体験が決定的に大きかったです。それが「ジャーナリズムとアートって近いんだな」と思ったのが最初のきっかけです。そこから興味や関心をもった展覧会に行くようになりました